豐田八十代先生著萬葉地理考を讀みて同先生の教を乞ふ（一）

住登勝藏

萬葉に關する私經濟に就きて聊か興味を覺え傍々地理的方面にも少しく研究してゐる際、舊臘、豐田先生著萬葉地理考を手にした、先生は寧樂の地にありて多年この方面の御研究を積まれかゝる文獻を發表されたことは並大抵の努力でなく從つて一般に裨益するところ尠しとしないのである。これを一讀して、未詳の部分がなほ多く殘されてゐるのを見て先生の研究的態度の堅實なるに敬服しました、只私は、その未詳の點につき何とか解決の出來ないものであらうかと思ひ、一は好奇心を以て、片端から再吟味を試みましたところ、益々種々の疑問が起つて來ました。甚だ以て失禮ではあるが萬葉に表はれたる地名を推斷する方法として、單に和名抄にある郡名に依ること、地名辭典に依ること、又實地踏査したる結果これに類似の地名が在るからといつて絶對的に之れと關係をつけてしまふことは危險であることを痛感したのである。それ等の研究法も、大切ではあるが、更に或地名に就いて(一)萬葉以外にその名所につきて讀みたる歌の有無を見附けること、(二)同名の地が各地にある場合に、その作者の旅程、作歌の順序等をよく考へてみる必要がある。(三)固有名詞とおもはるゝ地名が普通名詞である場合も多々ある。それで、先以て他に類似の歌の有無をよく詮索し研究することが最も重要なる考究

法の一つではあるまいかと思はれる。左に私の名物考によりて調べ上げたる一端を披瀝して著者の教を請ひたいと思ふのであります。

あさゝはをぬ（淺澤小野）

著者は、攝津と斷言してゐるが、又大和にもある。淺澤沼とよまれたのも同所であつて、攝津とのみは限らない。

萬葉（一三六一）に住吉の淺澤小野の杜若とあるから、攝津と思はれるが、淺澤小野は固有名詞ではないと思ふ。

夫木抄（卷一）文治元年六年五社百首、俊成卿「いさやこら若菜つみてん根芹おふる淺野小野は里遠くとも」同（卷一）家隆「春日野の淺澤小野のうす氷たれふみ分て若菜摘むらん」同、俊成「紫の色は深きを杜若淺野小野にいかで咲らむ」とある。

依つて、住吉の淺澤小野は攝津（住吉郡）にあるが、また春日野の淺澤小野は大和又は山城にも在るわけである。

あさづま（旦妻）（朝妻）

著者は、大和（金剛山の東、南葛城郡）とあるが、近江のあさづまであると思はれる。

萬葉（一八一七）「今朝行きて明日は來むといふ子鹿（はしやきし）旦妻山に霞たなびく」

同（一八一八）「子等が名に懸けて宣しき朝妻の片山ぎしに霞たなびく」

平兼盛集「朝妻の三井の木のかげしげりあひてさかえ行世を見るが樂しさ」

山家集「おほつかな伊吹おろしの風さきに淺妻舟はあひやしぬらむ」

同「くれ舟よ朝妻渡り今朝なせそ伊吹か嶽に雪しまくめり」

夫木抄（四）「旦妻や雲の遠方霞むなり花かあらぬか志賀の浦浪」

察するに「あさづま」に關する歌は、三井を合せたり、伊吹が讀み込まれてある所より見て、大和ではなく近江の朝妻を詠めたものかと思ふ。

あさぬ（淺野）

著者は、淡路國(津名郡)と推斷してゐるが、淺野といふは固有名詞(即ち名所)でなく只の朝の野といふ意味に思はれる。若し名所であるとせば近江の國(淺井郡)の朝日野でないかと思ふ即ち夫木抄(五)匡房「春の來ることやうれしきあかねさす朝日の野へに雉子鳴くなり」とあり

萬葉(三八八)に「海若(わたつみ)は云々瀧の上の淺野の雉子云々」とある。

夫木抄(卷一)光明峰寺入道攝政「岩そゝく氷とくらし瀧の上の朝野の若なけさやつむらむ」とあるそれで多分「あさぬ」は、只朝の野と解すべきであらふ。

あさは(淺葉)

著者のいふ如く、「あさは」は武藏國入間郡の麻羽(安佐波)又は遠江ならんとの推定であるが淺羽野は信濃にもある。寧ろ信濃のやうに思はれる。

萬葉(二七六四)「紅の淺葉の野らに刈萱の束のあひたもわをわすらすな」

同(二八六三)「淺葉野に立つる神占の菅の根のねもごろ誰ゆゑ吾戀ざらむ」

勝地吐懷編(下)「淺羽野にたつみは小菅ねふかめて誰故にかは我戀ざらむ」とある。この歌もと萬葉(第十二)に有り、上に「引紅の淺葉の野らに」とよめるも同じ野である。

勝地吐懷編(下)に「露深き淺間の野らにを茅かる賤の袂もかくはぬれしを」とあるが、この歌は或は淺葉の野らといふを書誤られたのかも知れない。

何れにしても淺羽野は信濃國にあることだけは事實である。

あじかま(味鎌)(阿遲可麻)(安治可麻)

未詳とあるが、これは恐らく地名ではなく津(みなと)(水門)又は潟といふ言葉の枕詞だらふと思ふ。

萬葉(二七四七)「味鎌の鹽津を指して搒く舟の名は告りてしを逢はさらめやも」

同(二五五一)「阿遲可麻の潟にさく波平瀨にも紐とくものかかなしけを措(おき)きて」

同(二五五三)「安治可麻の可家の湊に入る潮の言出すくもか入りて寢まくも」

鹽津は近江の津、可家は今の丹後の掛津を指すことは疑を容れない。そして、味鎌は、味鴨の轉誤といふが正當なる說であつて、即ち枕詞であらうと思はれる。

あしきた(葦北)

萬葉(二四六)「あし北の野坂の浦ゆ船出して水島に行かむ波立つなゆめ」

散木寄歌集に「あし北の野坂のうらのうつせ貝いもせそなへて幾代經ぬらむ」「あし北の野坂のうらにくもり來て松の南ははるゝしら雪」あし北に就きては、和名抄により肥後といふことになつてゐるが、名物考には蘆北驛、野坂浦共に大宰府にありといつてゐる。果して昔の蘆北國はどこ迄の範圍をいつたものか疑を容るゝ餘地が十分にある。

あなし(痛足)(病足)

萬葉(三一二六)「纏向の痛足の山に雲居つゝ雨は零れどもぬれつゝそ來し」

同(六四三)「世間の女にしあらば吾が渡る痛背の河を渡りかねめや」

大和の穴師であらふが、この地名は播磨にもあり、契沖は攝津の猪甘津(猪飼野村)ならむともいつてをるやうである。

あはのぬ(阿婆乃野)

萬葉(一四〇四)「鏡なす吾が見し君を阿婆の野の花橘の珠に拾ひつ」

この「あはの野」といふは、著者は今の奈良市附近との推斷であるが、鏡は鏡山のことであつて、近江の粟野を指すと思はれる。

夫木抄(七)從二位行家の歌に「時鳥今きなけとやかゝみなるあは野の原に匂ふ橘」とあつてこれにも鏡山がよみ込まれてあるから、どうしても近江の粟野でなければならない。

あみのうら(網の浦)

あみの浦は、定りたる名所でなく、只海人の網引浦の總名とおもはれる。

いはほろ(伊香保呂)

未詳とあるが、これは多分、上野國(群馬郡)の伊香保沼であらう。即ち「いはほろ」は「いかほろ」の書誤りと見る説が正しいと思ふ。

萬葉(三三一)「伊波保呂の傍の若松かきりとや君が來ませぬうらもとなくも」

同(第十四)東歌の中、上野歌「いかほろに天雲いつきかぬまづく人とおたばふいざねしめとら」

「いかほろのそひのはり原ねもごろに奥をなかねそまさかしよかば」

「いかほろのそひのはり原我まぬにつきよらしもよたとへと思へは」

「かみつけのいかほの沼にうゑこなぎかく戀んとやたねもとめけん」

「いかほせよなか〳〵しけにおもいとろくまこそしつとわすれせなふも」

いほさき(廬崎)(廬前)

萬葉(二一九八)「亦打山夕越え行きて廬前の角太河原にひとりかもねむ」

廬前につきては、紛はしき所が多い。辨基の歌「夕こえゆきていほ崎のすみた河云々」と讀んだのは、駿河のいほ崎であることは、明らかである萬葉に田口大夫が下野に下る時の清見かゐの田子の浦をよめる歌に續きて有るから、駿河のいほ崎(駿河國廬原郡、今いはら川といへるはいほはら河のことである)を讀んだのは疑ふまでもない。即ち今の三保の浦も昔は御廬浦とも御廬崎ともいつたのである。

著者は、紀伊の國と斷定されてゐるが、勿論紀伊國にもあるが、亦打山・いほ前・角田川みな、駿河國にあるので、辰見利文氏著大和萬葉地理研究にも亦打山(眞土山)を紀伊・大和の境となし、いほ崎を「いも生」と推斷してゐるが恐らくこれは誤りであらう。又下總(今の江戸)の墨田川・まつち山と同所でないことも明かで。駿河と見るが至當である。

「都鳥こゝにもあれや廬崎の角田川原も名こ

そかはらね」といふ歌もある位で、「夫木抄」家長の歌にも「いほ原や角田河原の磯まくらたひ〳〵見れど云々」とある。

いらごがしま(伊等籠荷四間)(伊良虞能島)

いらごがしま或はいらこ崎ともいふ。著者の所謂因幡の伊良子崎とみるは當らない。明らかに參河國の西南に出たる伊良古崎である。このいらご島は、志摩・伊勢・參河の三國に跨りてゐるので時代により志摩とも伊勢ともまた參河ともいはれたのである。

萬葉(二三)「うつそを麻績の王白水郎なれや射等籠荷島の珠藻苅ります」

同(二四)「空蟬の命を惜しみ浪にぬれ伊良虞の島の玉藻苅りをす」

萬葉(第一)「波のよるいらごが島を出る舟はやこきわたせしまきもそする」

同「鹽さゐにいらこか島へ漕舟に妹乘らんかあらき島回を」

夫木抄(基俊)「白波やいらこの島の忘れ貝わするとも我わすれめや」

以上の「打麻乎麻績」の歌は麻績王流於伊勢國伊良虞島之時哀傷作歌で「空蟬之」の歌は、麻績王聞之感傷和歌である。「潮左爲二」の歌は幸二于伊勢國一時、留京柿本朝臣人麻呂作歌である。

いりぬ(納野)(入野)(伊利野)

萬葉(一二七一)「劍のしり鞘に納野に葛ひく吾妹眞袖もち着せてむかも夏草ひくも」

同(二二七七)「さをしかの入野のすゝき初尾花いつしか妹がそで枕せむ」

同(三四〇三)「吾戀はまさかも悲し草枕多胡の入利野のおくもかなしき」

いり野は多分名所といふわけでないと思ふ只岩間に入り込みたる野といふ位の意味で、入江入間などと同一の表はし方であらう。

入野は山城國(乙訓郡大原野村)・上野國(多野郡入野村)・丹後國(竹野郡)にあり、又猶山拾葉集には近江國と出てゐる。

うきたのもり（浮田之杜）

著者は、山城國（久世郡淀町・下津町）と推定してゐるが、大和國（宇知郡）に在るとみるが正しいと思ふ。

萬葉（二八三九）「斯くしてや猶や守らむ大荒木の浮田の杜の標ならなくに」

隱しつゝさてややみなむ大あらきの浮田の杜のしめならなくに」といふこの歌は、元と萬葉（第一）の歌で、同集（第七）には大荒木野ともよみ、また第七、第十六には荒木の小田荒木田とも讀んである。これ等はみな同一の所である。

大和である證左は、延喜式神名帳に宇知郡荒木の神社とあり、續日本紀にも寶龜四年、八月辛亥左兵衛從五位荒木臣忍國、養老五年以往籍爲「大荒木臣」神龜四年以來不「著」大字「至」是著「大字」荒木と大荒木とは同一である。

曾丹集に「大あらきの下草にても風吹は靡きて神に祭りあへるかも」とあるは、山城と聞える。また近江の大あらきの里をよんだのがある。それで、大荒木浮田の森は、共に大和である。因に城上（きのへ）は、大和にあり、その殯宮は「アラキノミヤ」と讀む、薨去して未だ葬らない以前に祭祀をなす宮であるが、この集では葬後でもかく稱してゐる。殯は皇子以上に限りて行はれる。

うきぬのいけ（浮沼池）

萬葉（一二四九）「君がため浮沼の池の菱採むと我が染めし袖ぬれにたるかも」

浮沼の池は果して固有名詞なりと斷じ難い。前大納言兼家の歌に「もろ聲にいたくな鳴そさもこそはうきぬの池のかはつなりとも」とあるこの池果して石見の國三瓶山腹の池にや疑はしいやうに思ふ。

おきそやま（奥十山）（奥磯山）（於吉蘇山）

萬葉（三二四二）百岐年美野の國の高北の八十一隣（り）の宮にひむかしに行きなむ宮をありときゝて、「吾が通道（ち）の於吉蘇美濃山靡けと人は踏めども斯く依れと人は衝けども意無なき山の於吉蘇

山美濃の山云々」

おきそ山は木曾山のことで、後信濃に屬するが、元とは、美濃の國に屬したのである。

おしたるおぬ（押垂小野）

著者も未詳とあるが、攝津（垂水野）であることが確かである。

萬葉（三八七五）「琴酒を押垂小野ゆ云々」とある。「たるみ」は攝津國（豐島郡）延喜式神戸帳には豐島郡垂水神社 名神大月次新嘗 とある。

萬葉（第七雜）「衰さち久しきよしもいはそゝくたるみの水をむすびてのみつ」

同（第十二）「岩そゝくたるみのうへのさわらびのもえ出る春に成にけるかも」この歌古今集にあり。

散木集に「おりのぼる人のためとやこゝにしもあとをたるみのあけの玉垣」とある。

又、俊成卿の歌に「つらゝゐしたるみの杜のさわらびのをりにたにやは人のこさらむ」といふがある。

これ等はみな攝津の垂水野について、よんだので、カミ酒を押垂るといひかけ、又おりは、酒の涯（おり）にいひかけたのである。

おほうら（大浦）

萬葉（三八六三）「荒雄等がゆきにし日より志賀のあほの大浦田沼（たぬ）はさぶしからずや」

古義に示す如く大浦は筑前にある。志賀ノ島は同國（糟屋郡）にあり、その大浦に面してゐる田園は行樂が寂れるの意を讀んだのである。

源重之集にも「見よや君志賀の島へといそけともかのこまたらに波そ立ける」「秋くれば戀する志賀の島人もおのか妻をや思ひまくらん」「名をたのむ志賀の島へと漕來れとけふも舟路に暮ぬべき哉」「白雲のかゝれる峰と見えつるは志賀の島にはあらぬ成べし」等とある。

かけのみなと（可家能水奈刀）

著者は未詳とあるが、正しく丹後の掛津であるは、同國風土記にも出てゐるから疑を容れない。

萬葉(一四)「あちかまのかけの湊にいるしほのことだすくもかいりてねまくも」

新六帖爲家「潮むかふかけの湊のいる浪にあはれ我身の出かたき世や」

千首爲尹「月はまたおそかりぬへし松たてる陰の湊の夕やみのそら」

「日本書紀」(十四)大泊瀬幼武天皇雄略二十三年同上更追至丹彼國浦掛水門(みなと)盡逼殺之「勝地吐懷編上」懸湊丹後とある。

雄略紀に丹波國浦掛水門とある。丹後は丹波より後割かれたから丹後といふ。

「名所補翼抄」可家湊未勘、但東國とあり。新續古今津守國睿は陰湊とよんでゐる。

日本紀十四丹波國浦掛水門とある。即ち日本紀に見る浦掛水門の上を略してかけ(陰又は掛)湊といつたので、可家は假名で、陰は後に字を填たのである。契沖が補翼抄に萬葉(一四)の歌を出して可家湊未勘云々、日本紀十四丹波國水門、藻鹽丹後誤と出てゐる。

ささぬひのしま(笠縫之島)

著者は攝津と推斷するが、之れは參河の笠縫の島である。

萬葉(三七四)「四極(しはつ)山うち越え見れば笠縫の島こぎかくる棚なし小舟」

しはつ山は、豐後にもあるがまた參河國にもある。勝地吐懷編上に笠結島豐後大分郡とある。

和名抄には參河國幡豆郡磯泊之波止といふ郷在り、それで「ト」と「ツ」とは五音通するところからしはつ山はこの參河國磯泊(しはじ)の山を指すのである。

孝德紀に河邊臣磯泊(しはつ)といふ人あり、同文字にて之れは明らかに「しはつ」といつてゐる。

「しはつ山」が參河國とすれば笠縫(萬葉には笠縫とあり笠結は誤りならん)も同所と推斷し得る。素より、笠縫は攝津(西成郡の山)にもあり、古圖によれば今の生玉社・高津宮の邊に在る。また、豐後國なりとして笠縫といふ所も有るが、元來萬葉(三七四)の歌は、萬葉(第三)

に高市連黑人羇旅八首と有る中の第三の歌なので、その上に尾張國の歌があり、下にはまた近江・山城の歌が並んでゐるので、これから推量すると尾張守の屬官などにて任果てゝ上る時の歌であらうと思ふ。それで攝津の地名とみるは當らない。

かたのおほしま(可太之保保之麻)

萬葉(三六三四)「筑紫道の可太の於保之麻しましくも見ねばこひしき妹をおきて來ぬ」

未詳とあるが大島は各所にあるも、この大島は周防の大島を指すは古義の推定する通りであつて、萬葉(第十五)に周防國玖珂郡麻里布浦行之時作歌八首とて次に過『大島鳴門』而經『再宿』後、追作歌二首、次に熊毛浦船舶之夜作歌四首となつてゐる。熊毛も周防の郡名で、和漢三才圖會にも周防は、大島・玖珂・熊毛・都濃・佐波府吉敷の六郡にわけてある。

按ずるに可太は地名でなく、單に筑紫路の方又は傍の意味であらう。

かたかひがは(可多加比河波)(可多加比我波)

萬葉(四〇〇〇)「天さがる云々おばせる可多加比河波の云々」

同(四〇〇二)「可多加比の可波の瀨きよくゆく水のたゆることなくあり通ひ見む」

同(四〇〇五)「おたぎつ可多加比我波のたえぬごと今見る人もやまずかよはむ」

片貝川は和漢三才圖會によれば越中婦負郡に在り、魚津と三日市との間歩渡とある。

(未完)

○護謨の新利用法　ゴムの新しい利用法として考へられるものは、第一に蒲團である、ゴム製蒲團は藁製蒲團の代用品となる、第二に護謨製瓦は輕くして耐久力にとむ、第三に護謨液に纖維セルロイド等を混じて皿類を製造し得べし、第四に護謨點火材料は火つきよく且燃殘なし、第五に最も望ましきことは護謨道路である、現在の工程では尙高價に過ぐるも、用來れば適當な道路になる。